

マレーシア／アジアパシフィック大学／語学研修(2025年度夏期)

公認会計士を目指して -語学研修から学んだ国際的視野の重要性-

商経学部 多田花蓮

1. コミュニケーション

今回の1か月間のマレーシアでの英語語学研修において、最も印象的だったのはコミュニケーションの面である。私はこれまで高校時代に何度か海外プログラムを通して海外に行くことはあったものの、プログラムの主が英語学習ではなかったため、実際に英語を存分に使い他者とやり取りをしたりする機会はあまり多くはなかった。そのため、最初は自分の英語が本当に通じるのか、相手の話す英語を理解できるのか、文法の正確さなど、大きな不安を抱いていた。また、プレイスメントテストで解けた・出来た実感がなく、そのまま何故かレベル4のクラスに選ばれ、余計に周囲との英語力の差に焦りを感じていた。しかし、授業内外で積極的に英語を使い続けるうちに、徐々にその不安は自信へと変わっていった。

授業では、グループディスカッションやプレゼンテーションが頻繁に行われ、与えられたテーマについて意見を述べる機会が多かった。最初の頃は、考えをまとめてから発言しようとしているうちに時間が過ぎてしまうことが多く、満足に発言できないこともあった。しかし、次第に正確さよりも伝えることを意識するようになり、簡単な表現でも積極的に発言する習慣が身についた。

また、学校生活や日常生活の中でも英語を使う機会が豊富にあった。学食での会話や買い物の場面など、生活の一場面ごとに英語を使わざるを得ない環境は、自分の語学力を鍛える最高の場であったと言える。こうした実践的なやり取りを重ねることで、リスニング力・スピーキング力が確実に伸びたと実感している。様々な国から本当に沢山の学生が集まっており、授業外でも一緒に過ごすことが多く、お互い母国語が違い話すときは英語しか選択肢がなかったことも英語力の向上につながったと考える。

このように、研修を通して「英語を勉強する」から「英語で人とつながる」へと意識が変化したことは、自分にとって大きな成果であった。

2. 地域文化・生活

語学研修のもう一つの大きな柱は、地域文化や生活を肌で感じることであった。マレーシアは多民族国家であり、マレー系、中国系、インド系をはじめとした多様な人々が共存している。そのため、街に出ると多様な文化や言語、宗教が入り混じった独特の雰囲気を感じることができた。これは日本ではなかなか味わえない体験であり、異文化理解の重要性を実感する機会となった。

食文化に関しても大変刺激的であった。ナシレマやラクサといったマレー料理に加

え、中華系やインド系の料理も日常的に楽しむことができ、食事のたびに新しい発見があった。食堂や屋台で現地の人々と英語でやり取りしながら注文することも、語学力向上に直結した。こうした生活の中の英語は、授業で学んだ知識を実際に活用する場となり、学習効果をさらに高めてくれた。

さらに、私はこの研修期間中に目が充血し、大学のメディカルクリニックから始まり、日本語の通じるひばりクリニック、グレンイーグルス病院を受診し、やっとウイルス性結膜炎と診断された。一人で病院に行くことに対しては、授業など以上に英語力の不安があった。しかし、実際行ってみると何とかなってしまった。医療用語も飛び交う病院だったが、症状を伝えることができ、医師の言うことも理解することができた。そして、専門医と認定医が存在することを知った。私の今回の目の充血のように眼科とわかっているのならば、はじめから専門医に診てもらおうように言われた。大学のメディカルクリニックやひばりクリニックは認定医であり、グレンイーグルス病院は専門医。いずれも特定の分野で高い知識と技術を持つ医師だが、専門医はより高度で、認定医は基礎的なレベルの専門性を示す資格らしい。マレーシアの場合は日本と違い、紹介状がなくても総合病院で受診できることも初めて知った。これらの体験を通じて、語学力の向上は机上の勉強だけではなく、日常の中での挑戦によってこそ得られるものだとして強く感じた。

また、多民族社会での生活は、宗教的な行事や価値観の違いを尊重する姿勢を養うきっかけとなった。イスラム教徒の祈りの時間や、中国系の祭りの様子など、異なる文化を目にするたびに「違いを受け入れる大切さ」を学ぶことができた。

3. 自分自身の価値観

今回の研修を通じて、自分自身の価値観にも大きな変化があった。これまで私は間違えずに正しい英語を話すことを重視しすぎて、会話に臨む姿勢が消極的になりがちであった。しかし、マレーシアでの経験を通じて伝えようとする意欲こそが最も大切ということに気づいた。多少文法が崩れても、表現が拙くても、相手に伝えたい気持ちがあれば必ず通じるという体験は、自信につながった。

さらに、異文化の人々と交流する中で、自分の中にあった固定観念や先入観が崩れた。多民族国家で生活する人々の自然な共存の姿を見て、違いは壁ではなく、多様性は力になるという考えを持つようになった。これは語学だけでなく、人間関係全般においても重要な気づきであると感じている。

また、自分の学習姿勢についても見直す契機となった。これまで試験のための勉強が中心であったが、今回の研修では、実際に使える英語を学ぶ楽しさを知ったことで、学習そのものへのモチベーションが大きく高まった。これからは英語学習を継続していくことが、自分の可能性を広げることにつながると確信している。

4. この経験を将来どう生かしていきたいか

私は将来、公認会計士として活躍することを目指している。会計士の業務は国内にとどまらず、国際的な基準に基づく監査や、海外企業との取引、M&Aに関わる業務など、グローバルな場面が多い。その中で英語によるコミュニケーション力は欠かせないスキルである。今回の語学研修を通じて得た英語力の向上や異文化理解の姿勢は、将来のキャリアに直結する大切な財産となった。

具体的には、今回の研修で培った積極的に発言する姿勢や異文化を尊重する姿勢を、将来クライアントや海外の同僚と接する際に活かしたいと考えている。国際的な業務に携わる上で、語学力はもちろん、相手の文化や価値観を理解し、柔軟に対応できることが求められる。その点で、この1か月の研修は、自分に必要な力を実感する貴重な機会であった。

また、この研修は私に学び続ける姿勢の重要性を教えてくれた。語学は1度の研修で完成するものではなく、継続的な努力が不可欠である。今後も英語の学習を怠らず、将来は公認会計士として国際的な舞台で活躍できるよう、自分を磨き続けていきたい。

振り返れば、この1か月は短いようで非常に濃密であり、自分の人生において大きな転機となる経験だった。語学力の向上、異文化体験、自分自身の成長、そのすべてが将来の自分につながっている。今後はこの経験を礎にして、夢に向かって1歩ずつ前進していきたい。

